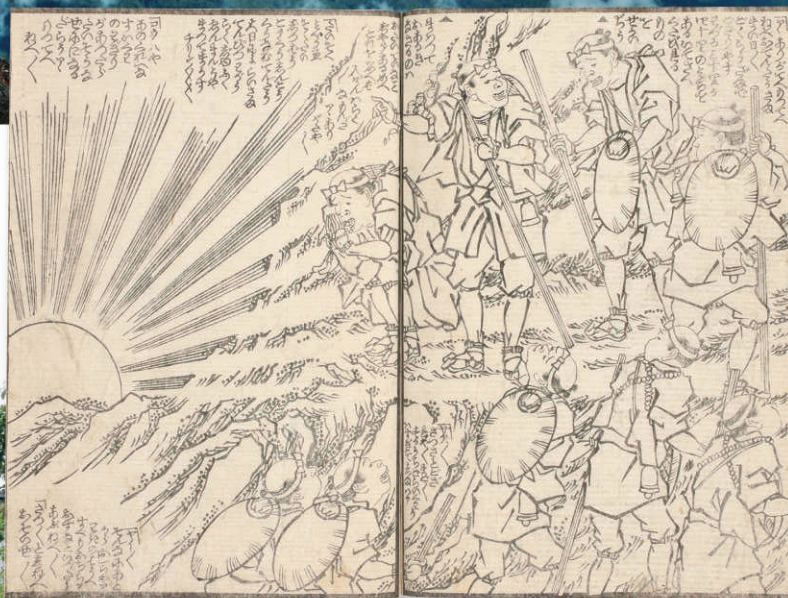


令和3年度 第2回企画展

富士山への旅

— 旅日記の世界 —



山梨県立富士山世界遺産センター



1「国々名山高山道しるべ」 富士市立富士文庫蔵
江戸時代（19世紀） 縦46.6cm×横32.8cm

相撲番付に見立て、全国の山々をランク付けしたもの。当時の相撲は大関が最上位であるが、見立番付の場合、中央の「行司」以下の欄に別格の存在を記す。ランクの基準ははっきりとしないが、ここでは行司として富士山が中央に大きく書かれ、他の山々とは一線を画す。版元は三河屋。

新型コロナウイルスによる感染症の流行、いわゆる「コロナ禍」は、人の移動に大きな影響を与えています。特に旅行については細心の注意が求められ、何も気にすることなく、ぶらりと旅に出ることが難しくなっています。現在は、旅に出る理由が旅に出る個人の数だけあると言える多様性が認められる時代です。仕事でなければ、どこに行き、どのように楽しむかは個人の嗜好によって異なります。

本企画展は主に江戸時代に時間軸を合わせました。当時も「仕事」で旅を日常的にしていた人びと一商人、運送業者、芸人、宗教者など一がいます。関所を通る時には、旅人の身元を証明する手形が必要になるので、旅のハードルは低くはありません。旅する理由も必要になるからです。仕事以外の理由は大体が寺社への参詣と湯治です。江戸時代も後半になると、参詣は建前で実態は山野で遊ぶ「遊山」の旅が増えると言われています。では、富士山を目的地とする旅も、全く信仰心とは無縁のものだったのでしょうか。本企画展では「旅日記」を主として紹介し、人びとが富士山へ参詣したことの意味を探ってみたいと思います。

当時の旅は、目的地へ一目散に行って帰ってくることは少なく、往復とも道中の寺社や名所などに寄るのが一般的です。江戸富士講の場合は、富士山に行く途中で高尾山（東京都八王子市）に詣で、吉田口から登り須走へと下り、帰路は道了尊（最乗寺、神奈川県南足柄市）と大山（伊勢原市）へ参るコースをとることが普通でした。江ノ島や鎌倉を見物することも多く、幕末には開港した横浜で遊ぶ場合もありました。このように富士山への参詣の旅をトータルにみて、旅人の富士山に対する想いを知ること、信仰の対象・芸術の源泉としての富士山への理解を一層深める一助となれば幸いに存じます。

令和3年（2021）12月

山梨県立富士山世界遺産センター

富士山へ参る

富士山へ登拝するためには、まず麓まで行く必要がある。江戸方面からは甲州道中・富士道^{ふじみち}を通して吉田口に、西国からは東海道を利用して駿河側の登拝拠点（村山口・須山口・須走口）へ来る傾向がある。尾張・三河からは、加賀の白山、越中の立山、そして富士山を巡る「三禅定」^{さんぜんじやう}を行う者が御坂峠を越えて吉田口に到着することもあった。

江戸時代後期、旅に出かける人びとが増えると、主な目的地を中心とした定番コースが出来上がる。富士山の場合は高尾山・道了尊・大山との参詣をセットにするコースが定番となる。特に中腹の大山寺不動堂と、山頂の石尊権現に参る大山詣をセットにする旅人は多かった。富士山にだけ登り、大山に登らないことは「片参り」と言って忌避されたともいう。ちなみに吉田口では、吉田口から登って駿河側の二口（須山・村山）に下山することを「御山を割る」として避けるべき事になっていた。吉田・須走・大山それぞれの思惑がからんで、富士山参詣のコースに影響を与えようとしていたのだろうか。

そもそも人びとが富士山に参る動機は何だったのだろうか。富士講の登拝のように、富士山に対する信仰心も当然考えられる。しかし、富士山は何よりも見た目が美しかった。その美しさは古来より文芸の題材とされたように人びとの心を揺すぶった。大坂の浮世草子作家・井原西鶴は「三国無双の美山」と言う（『一目玉鉾』）。地理学者・古川古松軒^{こしょうけん}は天明8年（1788）頃に陸奥の松島を訪れ、その景観を「富士山・田子の浦・清見ヶ関には劣るが、天橋立・厳島よりはるかに優れている」と評した（『東遊雑記』）。富士山についての情報や文芸作品は出版メディアによって人びとの間に広がる。眼下に雲を見るようなイメージも流布しただろう。そして富士山は日常世界から離れた「仙境」、神仏が宿り俗世とは違う「聖地」として見られる。富士山に参ることは、信仰心の満足と、仙境・聖地の体感を目的としたものが主流だったのだろう。



2「東面略図」 富士市立富士文庫蔵
明治時代初期（19世紀） 縦31.5cm×横40.7cm

須走口とその周辺の案内図。右下には大山に行く道程が書かれる。また「道了」（道了尊）・江ノ島・鎌倉など東京・静岡からの富士参りの定番コースを載せている。「東面」（ひがしおもて、須走口）から参詣するコースを想定しているのであろう。

参詣旅の記録

江戸時代後期の旅行ブームを受けて、旅の記録が多く残されることになった。その記録は紀行文や旅日記（道中日記）の形を取るが、紀行文は文章を書く能力のある者でなければ書けない。旅日記は主に日付や宿駅間の距離、道中の日々に要した金銭の額などを記録するもので、旅行中のメモといってよいものである。それは、例えば伊勢神宮や秋葉山などに代参した者が、旅中の経費の内訳などを講中に報告するため、もしくは子孫が同じ所まで旅行する時の参考に供するために作成された。そこには見聞したことへの感想などはほとんど記されず、多分に形式化された実務的な記録といえる（高橋陽一『近世旅行史の研究』など）。ここでは、富士山への参詣旅を記録した、以下の①～③の旅日記をあげる。

①寛政6年（1794）「富士石尊道中記」 下総国猿島郡志鳥村（茨城県猿島郡境町）から

7/5：出立、行田（泊）⇒7/6：扇子町（泊）⇒7/7：高尾山参詣、小原（泊）⇒7/8：大月（泊）⇒7/9：吉田、五合目（泊）⇒7/10：須走（泊）⇒7/11：道了尊参詣、幸山（泊）⇒7/12：大山参詣（泊）⇒7/13：子安観音参詣、一宮（泊）⇒7/14：江ノ島・鎌倉めぐり、新町（泊）⇒7/15：品川（泊）⇒7/16：馬喰町（泊）⇒7/17：杉戸（泊）⇒7/18：帰着

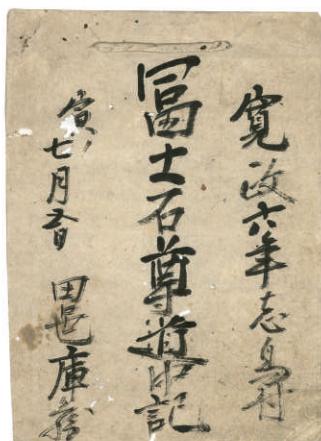
②安政6年（1859）「富士登山道案内日記」 下野国都賀郡小野寺村（栃木県栃木市）から

7/22：出立、松山（泊）⇒7/23：八王子（泊）⇒7/24：関野（泊）⇒7/25：大雨による出水で関野逗留⇒7/26：上野原（泊）⇒7/27：小沼（泊）⇒7/28：吉田、七合目（泊）⇒7/29：小御岳・胎内参詣、吉田（泊）⇒8/1：竹之下（泊）⇒8/2：道了尊参詣、町屋（泊）⇒8/3：大山参詣、四ッ谷（泊）⇒8/4：藤沢山参詣、江ノ島・鎌倉めぐり、金沢（泊）⇒8/5：横浜で「異人見物」、川崎大師参詣、大師河原（泊）⇒8/6：江戸神田富山町（泊）⇒8/7・8/8：江戸逗留⇒8/9：芝居見物、浅草雷門前（泊）⇒8/10：浅草観音参詣、粕壁（泊）⇒8/11：帰着

③万延元年（1860）「富士参詣道中日記」 信濃国（長野県）方面から

（出立日・場所不明）⇒7/8：台ヶ原（泊）⇒7/9：藤野木（泊）⇒7/10・7/11：富士山⇒7/12：甲府柳町（泊）⇒7/13：台ヶ原（泊）⇒（帰着日・場所不明）

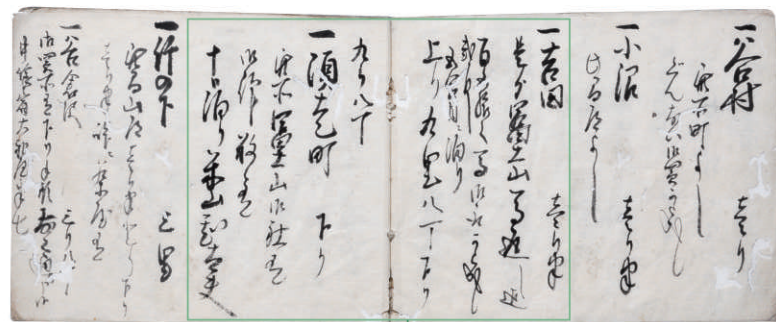
①は下総国猿島郡志鳥村（茨城県境町）の田邑庫蔵なる者が何人かの同行者と、②は氏名未詳の者が3人連れで、下野国都賀郡小野寺村（栃木市）から富士山へ詣でた際の旅日記である。③は宇治愛之助という者が御坂峠を越えて参詣した時の旅日記で、記載は甲斐国内のみに限られている。①②から富士山参詣の旅は高尾山や道了尊・大山、そして江ノ島・鎌倉見物を組み合わせたコースをたどったことがわかる。これは江戸を含む関東からの富士参詣旅の定番コースだった。



3「富士石尊道中記」 個人蔵
寛政6年（1794）

縦12.4cm×横17.1cm

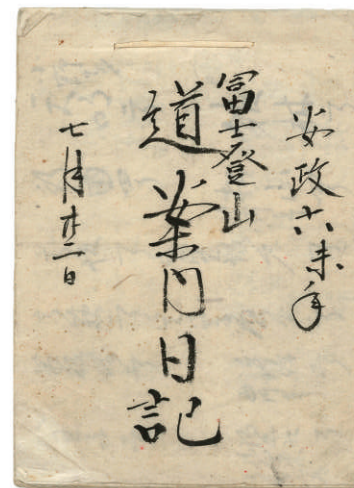
表題にある「石尊」は相模の大山を指す。富士山と大山をセットにする参詣旅は江戸時代では一般的だった。この旅日記は經由地間の里程、休泊した宿屋、川を渡る場所、参詣した寺社などを記す。



「富士石尊道中記」部分

7月9日に谷村を経て吉田口から登拝、翌日、須走に下り宿泊。11日に竹の（之）下・谷（矢）倉沢に至るまでの部分。

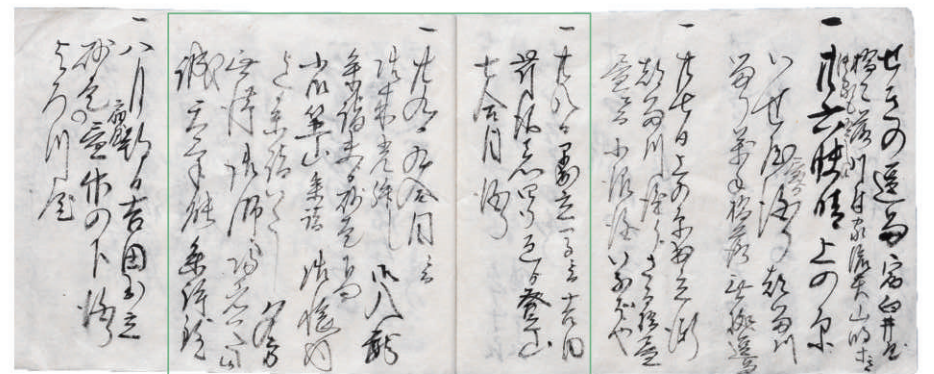
一吉田 壹り半
是より富士山馬返し迄
百五拾文、馬御取可被成候
式百文
五合目ニ泊り
上り九里八丁、下り
九里八丁 下り
一須走町
此所富士山御社有、
御師数々有
十日泊り、米山勘太夫



4「富士登山道案内日記」 個人蔵
安政6年（1859）

縦12.1cm×横16.9cm

記載していることは3「富士石尊道中記」と同じだが、内容をやや詳しく書いている。8月5日にはこの年の6月に開港したばかりの横浜を見物しており、富士山参詣の帰りのコースに新しい名所が加わる。



「富士登山道案内日記」部分

写真は7月25日から8月1日までの部分。甲州道中・関野宿（神奈川県相模原市）で大雨による出水で橋が落ち、逗留を余儀なくされる。上野原でも鶴川が渡れるようになるまで待機した。当時の旅は長丁場になるので、このようなトラブルに遭うことはしばしばあった。7月28日に小沼を早朝に出て、吉田御師の芹沢氏（霞屋）に寄り、午前10時過ぎ、いよいよ登拝に発つ。

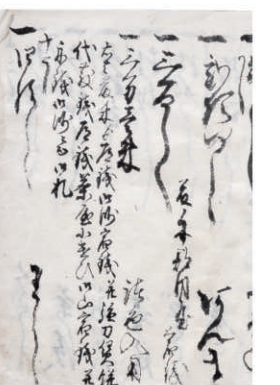


5「富士参詣道中日記」 個人蔵
万延元年（1860） 縦13.0cm×横15.8cm

参詣者の宇治愛之助は、往復、台ヶ原宿（北杜市）に泊まっている。信濃の伊那郡もしくは諏訪郡あたりから富士山に來たのであろうか。



同日
一式拾四文
一三百文
一三分壹朱
右者藤ノ木より道銭、御師宿銭并強力賃・餅代・敷銭・道銭・茶屋小遣ひ・御山宿銭并舟銭、御師三而御札
十二日
一四拾文
わらし
藤ノ木郡内屋
あんま
宿銭
諸色入用



「富士参詣道中日記」部分

旅中に入費だけを記したシンプルな形式である。

富士山の御縁年

60年に一度巡ってくる庚申の年は富士山の御縁年である。これは孝安天皇92年の庚申年に、覆っていた「雲霧」が晴れたので富士山が初めて出現したという伝説に因む。明応9年（1500）の庚申年に「この年6月、富士へ参る道者は限りがない」と記録されたように（『勝山記』）、御縁年には富士山に多くの人びとが参詣した。

御縁年の周知に大きな役割を果たしたのが吉田御師である。元文5年（1740）の御縁年に際しては、その旨を記した札を江戸の「辻々」に立てたいと寺社奉行に願い出ている。これは許可されたらしく、以後、御縁年の札を立てる場所も増えた。札に記す文面は、万延元年（1860）のものをみると、まず前述したような富士山の出現に始まり、日本武尊が北口から拝して仮に鳥居を建て、以来「三国第一山」と号したこと、そして来る御縁年には大祭・神事を執行するので、4月から8月まで男女に限らず信心の輩は参詣することを呼びかけている。

「男女に限らず」と女性にも登拝を勧めており、富士山へのより多くの参詣者の来訪を目論んでいる。女性は普段は二合目までしか登拝が許されなかったが、御縁年には四合五勺の御座石浅間社まで認められたという。多くの女性の登拝のイメージを描いた浮世絵も出された。

万延元年の御縁年には、その関連本も何種類か出版され、富士山への参詣旅の盛り上がりに一役買った。戯作者・四方梅彦は、吉田口からの登拝を想定した案内記『富士山道知留辺』を編集した。その梅彦と狂歌を通して交流があった假名垣魯文は『滑稽富士詣』という通俗的なフィクション本を著した。実際の参詣者の増加と相まって、富士山への参詣旅が大きくクローズアップされたのである。



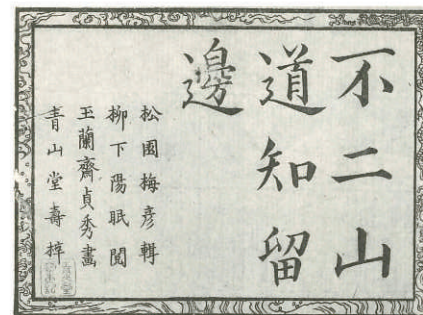
6 歌川芳幾「富士山北口女人登山之図」

万延元年（1860）

小山町立図書館蔵安田貞次コレクション

三枚続 縦36.0cm×横75.3cm

万延元年の富士山御縁年に際して出された木版多色刷の錦絵。右上に「富士山御縁年令式」と題した、男女の参詣を勧める吉田御師の立て札を載せる。札を立てた場所も書き込んである。八合目辺りまで登拝者の列が続いており、ちらほらと女性らしき顔が見える。実際には四合五勺までだったが、イメージとしては富士山が女性にも開放される特別な機会として御縁年がとらえられている。なお、左上には江戸の日本橋から甲州道中・富士道を通り吉田へ至る里程が載せられており、人びとは富士山への参詣旅の思いをかき立てられたことだろう。作者の歌川芳幾（よしいく）は、斬新なアイデアや風刺で知られた歌川国芳（くによし）の門下で、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師。「血みどろ絵」で著名な兄弟子・月岡芳年（よしとし）と人気を二分した。



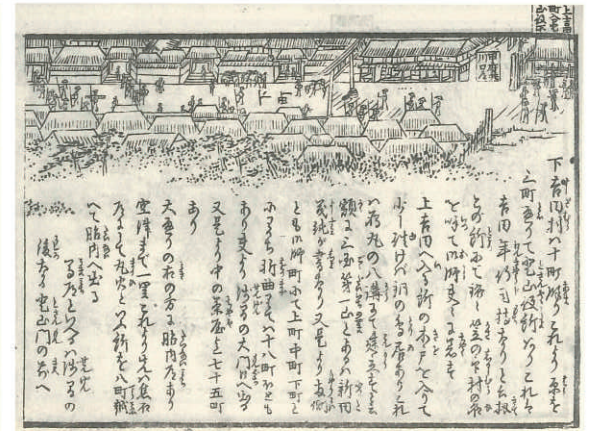
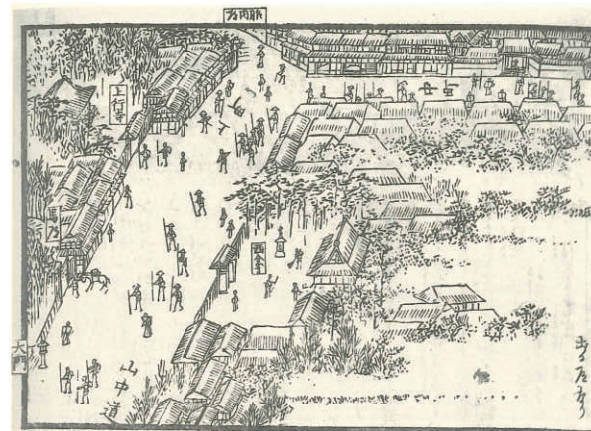
7 四方梅彦編『富士山道知留辺』

万延元年（1860）

小山町立図書館蔵安田貞次コレクション

縦11.2cm×横16.5cm

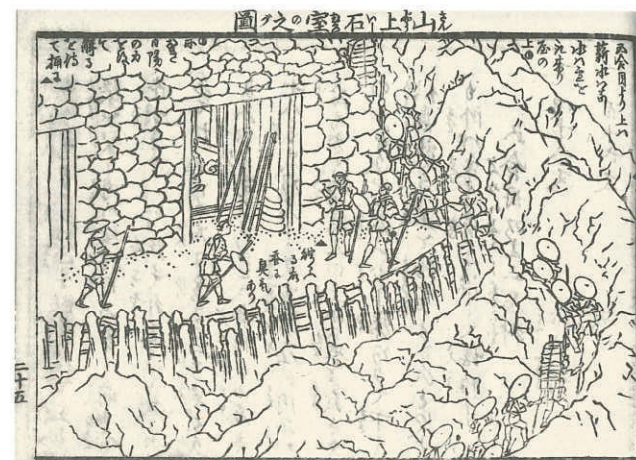
富士山御縁年のため登拝者の増加を見越して江戸で出版された案内記。江戸から吉田までの往復路の略図、登山道や頂上の要所、駿河側の登山道や名所、山役銭の額などを詳細に記す。著者の四方梅彦は戯作の第一人者・初代柳亭種彦（りゅうていねひこ）に師事、幕末から明治まで人情本などを著し、歌舞伎の台本も手がけた。



『富士山道知留辺』に載る吉田の様子

右上の「上吉田町入口登山役所」から金鳥居をくぐり、下町・中町・上町の上行寺前の横通りまでを描く。上町の上には船津胎内へ行く「胎内道」、左手には山中村へ至る「山中道」の表記がある。道者が賑やかに行き交っているイメージで描かれている。

下吉田村八十町余り、これより原を三町通りて登山役所あり、これは吉田年行司持なりと云、扱この所にて、銘々笠の印、村の名を呼んで御師夫々に着す、上吉田へ入る所の木戸を入りて少し往けバ、銅の鳥居あり、これハ雁丸の八講にて建立すと云、額に三国第一山とあるハ新田義純が書なり、又是より両側とも御師町にて上町・中町・下町とにわかち、折曲りてハ十八町ほともあり、夫より浅間の大門口へ出る、又是より中の茶屋迄七十五町あり大通りの右の方に胎内道あり、空（舟）津まで一里、これより先ハ焦石道にして丸火（尾）といふ所を八町越へて胎内へ出る馬道といへるハ浅間の後なる登山門の前へ出る道なり



『富士山道知留辺』より「山上石室之図」

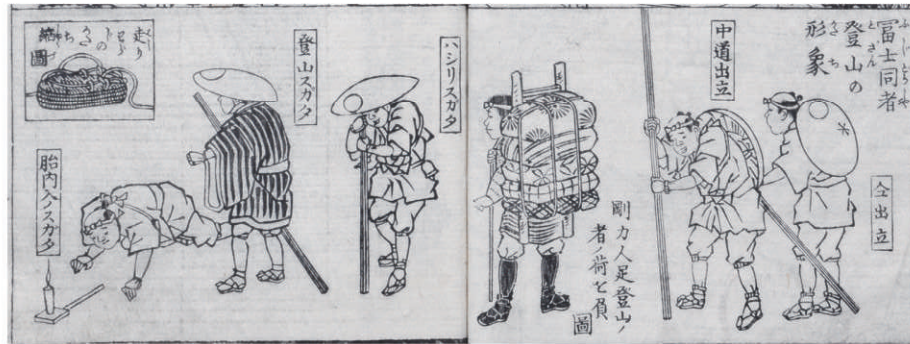
富士山の五合目以上では、登拝者が休泊する小屋は左の図のような石室である。五合目から上では薪（まき）も水も得られない。そのため凍り付いた雪の塊を屋根に置き、陽に当てて溶かした水を桶にためて使っていた。このことは富士山の多くの紀行文にも記されている。

五合目より上ハ薪水ハなし、水ハ雪を取来り、屋の上におき、日陽の力を汲て解るを待て桶に貯くふる故、呑に臭気あり

～『滑稽富士詣』～

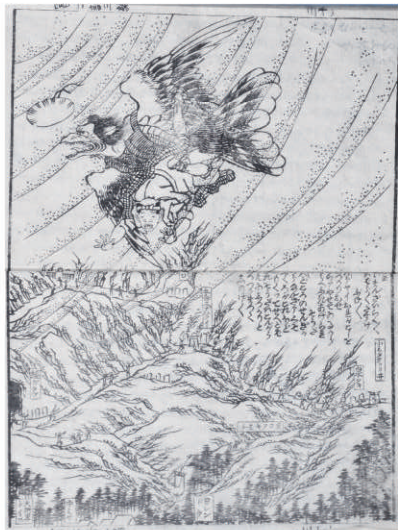
万延元年（1860）の御縁年を背景として滑稽本『滑稽富士詣』は刊行された。各編上下の2巻に分かれた10編全20冊が翌文久元年にかけて続々と出されるが、これは長編の滑稽本としては異例の刊行スピードである。作者の假名垣魯文は、明治維新期に『安愚楽鍋』などで文明開化の世相を描いたことで知られるが、出世作となったのがこの『滑稽富士詣』である。明治16年（1883）には魯文本人による改訂版『滑稽道中膝車』も出版されているので、多くの読者を獲得したのだろう。挿絵は横浜絵や開化絵で知られるようになる歌川芳虎が描いた。

魯文は「抑富士ハ、宇宙の間擬ふべき山なく、世界無双の高嶺にして、天地開闢自然湧出の神嶽」と述べており、富士山を神聖視する感覚は持っていただろうが、内容は江戸の庶民の参詣旅をとにかく滑稽に描いている。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』と同系統だが、弥次・喜多といった特定の主人公はなく、複数の参詣のグループが、それぞれ入れ替わり所々で騒動を起こす場面をつなぐ構成になっている。場面は江戸から甲州道中・富士道経由で吉田、登拝後は須走に下り、三島明神、箱根の温泉、道了尊、大山、横浜を巡って江戸に帰着して完結している。既存の紀行文や案内記などを参照して、江戸からの最も一般的と思われる富士山参詣のルートを設定したのだろう。フィクションながらも富士山への参詣旅の大衆化・世俗化を示しているような作品である。



8 假名垣魯文作『滑稽富士詣』（部分） 小山町立図書館蔵安田貞次コレクション
万延元年（1860）－文久元年（1861） 各縦17.9cm×横11.8cm

本資料は各編の上下巻が合巻になっている。図は二編上之巻の冒頭に載る「富士同（道）者登山の形象（かたち）。滑稽本という性格上、挿絵が豊富である。



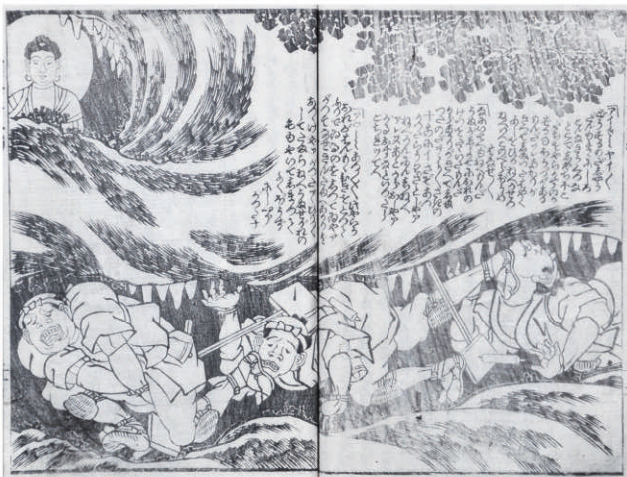
三編下之巻

「山酔い」した道者が突然、姿を消す。ここでは天狗にさらわれたとする。



四編下之巻

砂走を下る様子。



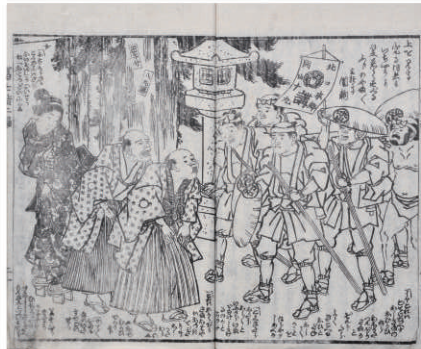
三編下之巻

「胎内潜」の図。ろうそくの火で局部を焼かれるという滑稽な話になっている。



初編

江戸を賑々しく発つ参詣者たち。御縁年ということで女性も交じる。初編は甲州道中八王子宿までを書く。



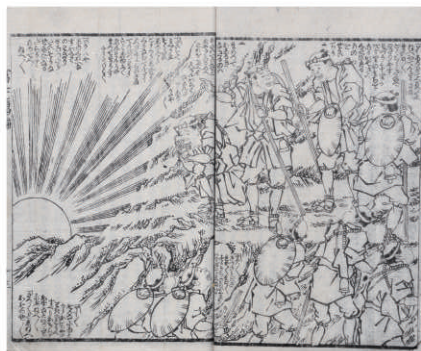
二編

吉田で御師宅に泊まり、登拝に出発するまでを書く。図は御師に迎えらる講中（藤丸）。御師は羽織袴の正装で講中を迎え、坊まで先導する。



三編

浅間神社の前で子どもに銭をねだられるところから、八合目に着くまで。五合五勺の小御岳を参詣している場面もある。



四編

八合目の石室に泊まり早朝に出発。図のように「御来迎」を拝み、須走に下る。宿では下山祝いの酒盛りになる。



五編

三島明神に詣で、箱根に至るまでを書く。実際は箱根の北の矢倉沢へ向かう者も多かった。図は三島宿内の茶漬け屋の場面。



六編

箱根権現に参詣して、畑宿で名物の木工品をひやかす場面。このあと湯本の現在も営業する「福住（ふくずみ）」に宿泊する。



七編

魯文は箱根の場面に多くを割く。七編では塔ノ沢温泉についても記す。図は「福住」での入浴シーン。



八編

箱根から小田原宿、そして道了尊参詣を描く。図は参詣後に日が暮れて、松の木を天狗と見間違える場面。



九編

富士山参詣の旅は大山詣とセットになることが多かった。九編では、露店も出て賑わう大山の門前の様子が描かれる。



十編

横浜見物に出かける。港崎（みよざき）遊廓では、中国人に扮して遊ぶ。江戸高輪で出迎えの人びとと出会う場面で完結。

賀茂季鷹の参詣旅

賀茂季鷹は京都の賀茂別雷神社（上賀茂神社）の祠官の家に生まれ、有栖川宮職仁親王より和歌の手ほどきを受ける。19歳で江戸に下り国学や歌学を身に付け、38歳で帰京し賀茂社の祠官となる。文人と広く交友し、京都の代表的歌人と目され、京都に帰る前年に富士山に参詣、『富士日記』を著した。

寛政2年（1790）、賀茂季鷹の富士山参詣旅

7/18：江戸亀島（東京都中央区）を出立、府中で小野神社に詣でる、八王子（泊）⇒ 7/19：犬目（泊）⇒ 7/20：猿橋に憩う、吉田着、御師刑部氏（泊）⇒ 7/21～23：吉田に逗留 ⇒ 7/24：登拝に出発、八合目の石室で憩う、登頂、八合目（泊）⇒ 7/25：砂走を下る、小御嶽に詣でる、吉田（泊）⇒ 7/26～27：吉田に逗留 ⇒ 7/28：御坂峠を越える、甲府城下もしくは周辺（島田式穀宅に泊）⇒ 7/29～8/1：逗留 ⇒ 8/2：武田の古城など見物、朝気村馬場氏（泊）⇒ 8/3：国玉の御社と酒折宮に詣でる、国玉村（泊）⇒ 8/4：差出磯・石森など見物、国玉村（泊）⇒ 8/5：川田村、島田式穀宅（泊）⇒ 8/6～8：逗留 ⇒ 8/9：出立するも川留、川田村（泊）⇒ 8/10：甲州道中を東に行く、猿橋（泊）⇒ 8/11：駒木野（泊）⇒ 8/12：帰着

登拝後は甲府周辺でしばらく逗留する。この地域の文人の家に泊まり、交流を持った。川田村（甲府市）の俳人・上谷敲氷、一町田中村（山梨市）の国学者・歌人の萩原元克、それに甲府町年寄を務める春日（山本）昌預などが季鷹と交わっている。昌預は天明元年（1781）、元克などの協力を得て『万葉集』の書写を成し遂げた。そこに『万葉集』の研究者でもある季鷹が来訪したのである。季鷹にとってこの旅は甲斐の文人との交流が一つの目的だった。

しかし富士山参詣は単なる名目ではない。登拝することはかねてから吉田御師・刑部国仲（小猿屋）との約束であった。過去に肥後の秋山玉山（漢学者、熊本藩校時習館の初代教授）が登拝したことに思いを寄せ、自身も登ってみたいと願ってこいた。下山後の逗留中は、そこかしこに出歩き、和歌を短冊に書き、『古今和歌集』の字句について質問をされたりして過ごす。季鷹にとって富士山参詣は地域の文化に触れる旅でもあったのである。

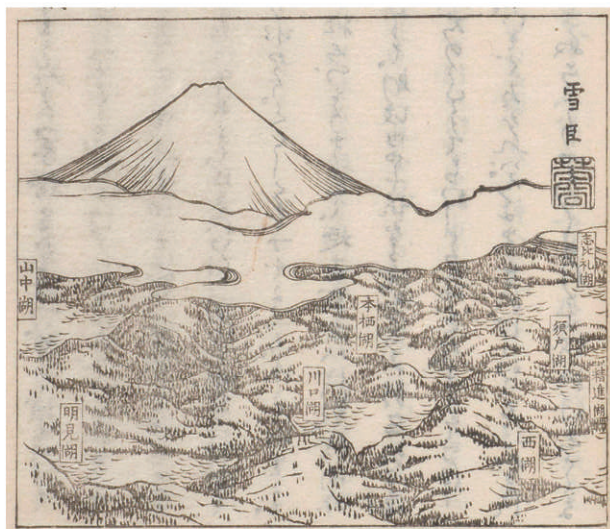


9 賀茂季鷹『富士日記』

文政6年（1823）版

寛政2年（1790）に富士山に登拝した季鷹は、その後吉田御師・刑部国秀（小猿屋）に『富士日記』がほどなく出来上がるので進上すると書簡で知らせている。当代一流の文人である季鷹の著作ということで、何回か版を重ねた。本資料は文政6年版で、当時の旅ブームの風潮下、広く読まれたようである。

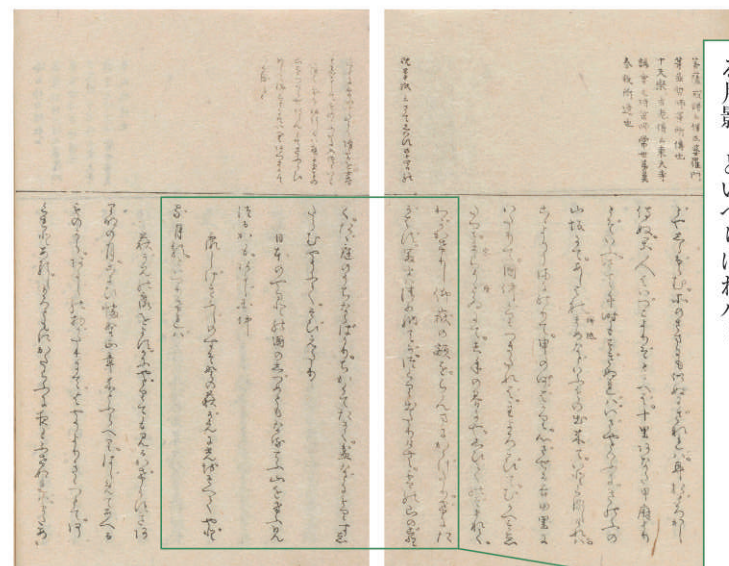
後に『江戸名所図会』の挿絵を描く長谷川雪旦の手による富士山と内八海。



文政6年版には岡本豊彦・吉村孝敬（こうけい）・原在明（ざいめい）・長谷川雪旦（せったん）といった絵師が挿絵を描いている。上の図は、本文の前の部分に書かれた豊彦による富士山の図。豊彦は文人画・写生画で高名な呉春（ごしゅん）の門下筆頭と言われた絵師。季鷹や歌人の香川景樹（かげき）とともに寄合書の掛け軸を作ったこともある。



写生画を広めた円山応挙（おうきょ）の門下・吉村孝敬が描いた猿橋。7月20日早朝に甲州道中・犬目宿を出た季鷹は、猿橋を見物し、この日の内に吉田に着く。



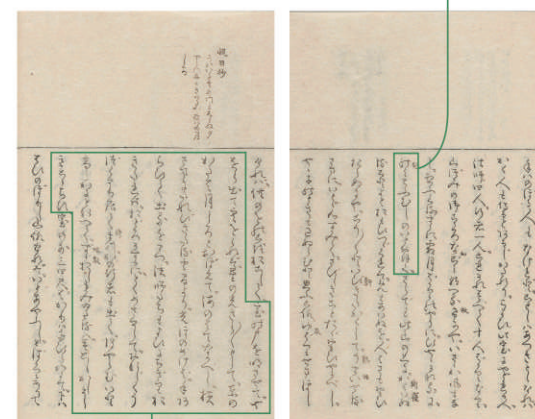
7月20日に吉田御師・刑部国仲（小猿屋）へ到着してからの部分。かねてから親交があり、前年の春に季鷹が贈った「仰嶽の額」が客間の欄間にかけてあり喜ぶ。そして富士山を題材に国仲と和歌を詠み合う。

：わがかけりし仰嶽の額を、らんまにかゝげたり、げにたがはず、富士ハ清少納言が、つくり出たりけむ、雪の山のごとく、たゞ庭のうちになるばかり、ちかくてたかく、盆などにもりすゑたらむやうにて、そびえたり
日本のやまとの国のしづめとも なるてふ山をけふ見
つるかも あるじ国仲
露しげきふじのすそ野の萩がえに 光をそへてやど
る月影 といへりければ：



御所の障壁画の制作にたずさわった原在明による「富士山絶頂図」。季鷹は7月21・22日の諏訪神社の大祭（吉田の火祭）翌日の23日中に絶頂に至る。案内人にお鉢巡りを勧められるが、所々も大方見渡せると言っで巡らない。紫・赤・白が交じった色の石を、「山づみ」（山の神）に請い受けたとして土産にする。この後、八合目の石室に宿泊する。室では主人から、例年のこの時期は登る人もいないけれど、今年は暑いので、まだ登拝者がいることを聞く。

のミてふむしのいとおほく…



：室の戸を明させて、やをら出て空をミれば、星の光きら／＼として、東のかたは月しろとおほえて、海のはてなるべし、横さまにたなびきたる雲間より、光ほのめけば、手あらひて出るをまつ、法師たちもよひにちぎりおきたれば、おどろかするに、とくめさまして、おなじくうづくまり居てまつ、かの行者も出て、何やらむいと高らかにとなへて、ずゝおしもみたるハ、すこしかしましきこゝちす：

八合目の室に宿泊する部分。「法師」や「行者」など10人ばかりと同宿。蚤の多さに悩まされる。のちに『滑稽富士詣』（p 8-9）も、石室で蚤の大群に襲われ一騒動起こる場面を描いている。午前零時に小用のため外に出ると、月や星の光が織りなす眺めに感動する。行者は数珠を揉んで、何やら唱えていたという。

身延山と富士山へ

江戸時代の旅日記や紀行文に記されるような参詣旅は、一番の目的地だけでなく、道々の寺社に詣で、名所を巡ることが一般的である。富士山参詣旅は、江戸の富士講の場合、多くは高尾山・^{どうりょうせん}道了尊・^{おおやま}大山への参詣をコースに組み入れた。これに加えて江ノ島・鎌倉を巡ることも多く、19世紀には定番コースとして認知された。もちろん参詣者によっては定番コースをとらない者もある。また、先を急ぐ場合が生じた時などは、当初、予定していた寺社への参詣を取りやめる場合もあった。それでも、富士山にだけ詣でるという旅は少ない。

ここに紹介する原徳（得）斎の「富嶽行記」は、当時メジャーだった身延山詣と富士登拝を組み合わせたことを記す珍しい旅日記である。同行者に兄、友の他、実母を伴うという点も珍しい。著者の徳斎は寛政12年（1800）の富士山御縁年に京都で生まれ、原念斎の養子になり、江戸に移り幕府に仕えた儒学者である。実父・志賀理斎も儒学者で旅行を好んだと伝わる。徳斎は文政11年（1828）、富士登拝の「念」を起こす。それは世の煩惱から逃れ、見聞したことのない「絶景勝地」に行き、「仙界」の客になりたいとの思いから生じた。甲州道中を進んだ後、富士川を下る舟を利用して身延山久遠寺に参詣し、村山口より登拝する。

文政11年（1828）、原徳斎の富士山参詣旅

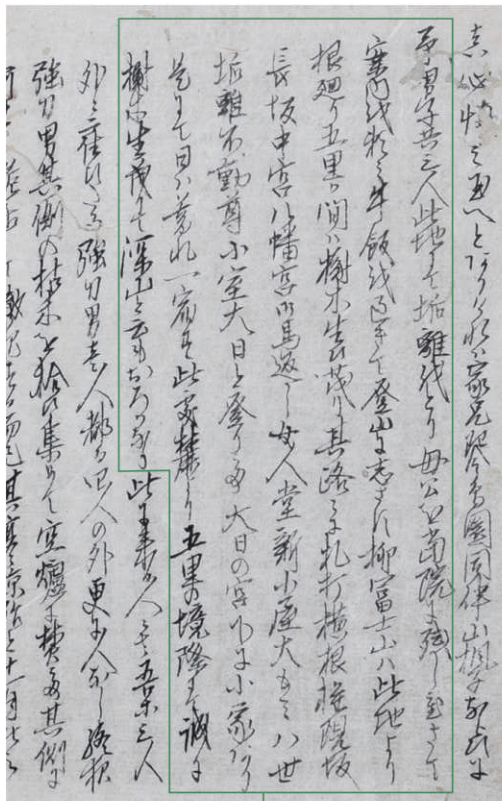
5/24：江戸根岸（東京都台東区）を出立、石原（泊）⇒5/25：府中で六所明神に参詣、大戸村（泊）⇒5/26：高尾山参詣、与瀬（泊）⇒5/27：猿橋（泊）⇒5/28：鶴瀬（泊）⇒5/29：天目山見物、栗原（泊）⇒5/30：酒折宮参詣、武田氏の古城を見物、鰍沢（泊）⇒6/1：富士川下り、身延山参詣、南部（泊）⇒6/2：大宮（泊）⇒6/3：村山口より登拝、室大日堂の木戸室（泊）⇒6/4：絶頂、村山大鏡坊（泊）⇒6/5：本門寺参詣、白糸の滝見物、大宮（泊）⇒6/6：曾我八幡宮と曾我寺に詣でる、沼津（泊）⇒6/7：三島明神・早雲寺に参詣、小田原（泊）⇒6/8：大磯見物、藤沢（泊）⇒6/9：遊行寺参詣、江ノ島見物、鎌倉（泊）⇒6/10：鎌倉見物、三崎（泊）⇒6/11：三崎見物、浦賀（泊）⇒6/12：神奈川（泊）⇒6/13：帰着

身延山についてはほとんど記述していないが、富士山については多くを述べている。母は中宮の「女人堂」まで登った。その後は宿の大鏡坊まで戻り、息子たちが絶頂まで登って帰って来るのを待つことになる。帰路は大磯（神奈川県中郡大磯町）や三浦半島の三崎を巡るという海辺へのこだわりを見せる。儒学者だけに道中の歴史的名所に興味を持つ傾向があり、富士山をメインに据えながらも、ごく身近な者と一緒の旅の個性がみてとれる。



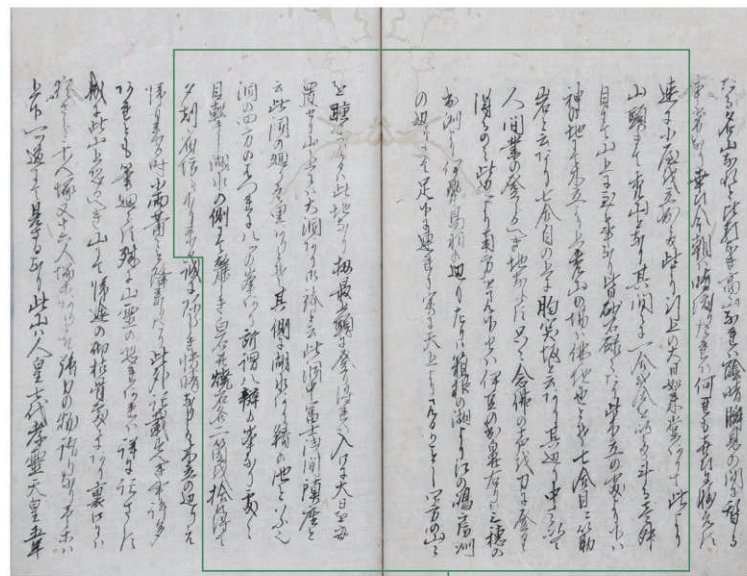
10 原徳斎「富嶽行記」
富士市立富士文庫蔵
書写年代未詳
縦23.9cm×横16.0cm

文政11年6月に徳斎が書いた文を、子の昌が書写したもの。序文冒頭に「行李之友」と題名が付いており、「富士詣行李之友」の書名としても写本がつくられた。



6月3日の登拝の部分。大宮から村山の大鏡坊に着き、登拝する旨を申し込むが、「まだ時期が早いから同役と相談する」と院主に言われ待たされる。結局はずいぶんと「真心」を慎んで登るべし、と認められる。室に宿泊した際、強力から大小の用は必ず懐中紙を地に敷いて、その上にするよう注意を受ける。このことは富士山への紀行文などにはしばしば記される。ここでは山を汚すことの忌避は、「鼻高様」（天狗）が多い場所だからと、強力は説明する。

：予（徳斎）男子（兄と友）共三人、此地にて垢離をとり、母公を当院に残し置、さて案内を頼ミ、午飯を過ぎて登山に志さず、抑富士山ハ此地より根廻り五里か間ハ樹木生ひ茂り、其路々に札打・横根・権現坂・長坂・中宮八幡宮・御馬返し・女人堂・新小屋・大ミ・八世（笹）垢離・不動尊小室・大日と登りて、大日の宮下に小家あり、是にて日ハ暮れ一宿す、此処麓より五里の境際にて、誠に樹木生茂りて、深山と云もおろかなり：

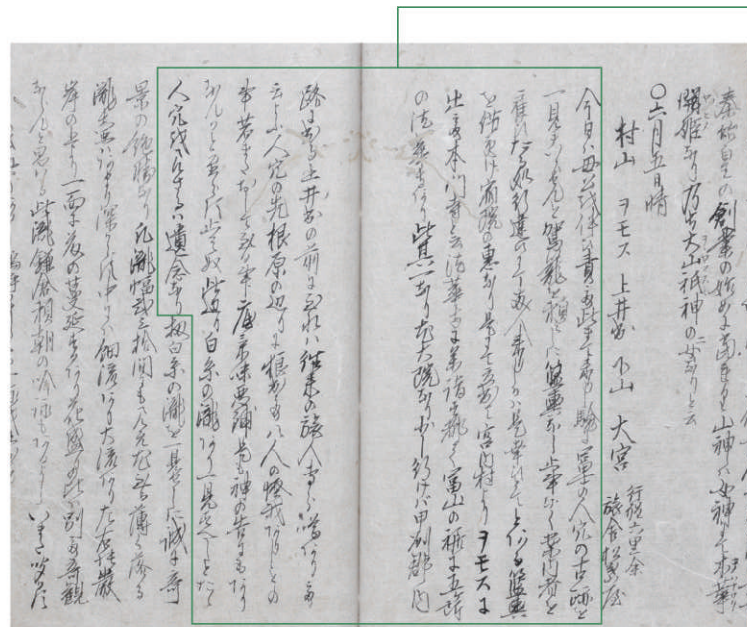


：速に小屋を立出て此より行、上の大日如来堂ありて、此より山頭まで禿山となり、其間々に一合式合を以て斗る壺升目にて山上に至る事なり、皆砂石碌々たり、此木立の処より下ハ神の地にて、木立より上、禿山の場合ハ仏地也とぞ、七合目ニ筋岩と云あり、七合目の上に胸突坂と云あり、其辺り中々以て人間業の登らるべき地ならず、只々念仏の声を力に登り得るのミ、此辺より南方を見下せハ伊豆の出鼻、右リハ三穂（保）の出洲より伊勢・鳥羽の辺り、左リハ箱根の湖より江の嶋・房州の辺りまで足下に連れり、実に天上より見るかとし、四方の山々を踵に見るハ此地なり、扱最上頭に登り得れハ入口に大日を安置せり、山上にハ大洞あり、御鉢と云、此洞中富士浅間鎮座と云、此洞の廻り壺里ありとぞ、其側に湖水あり、鰍の池といふ也、洞の四方のはつれにハツの峯あり、所謂八弁の峯なり、処々目撃し、湖水の側にて麗しき白石井焼石各二箇を拾ひ得て、夕刻宿坊江下り来る：

6月4日、絶頂の部分。徳斎は富士山の信仰領域について、木立までは「神の地」、そこから上の「禿山」は「仏地」という認識を示す。絶頂では大日・「大洞」（内院）・鰍池（このしろいけ）・「八弁の峯」について述べるが、「山霊」の恐れがあるので詳細には記さないとする。賀茂季鷹は絶頂で山の神に言及したが（『p11』）、徳斎も富士山の神霊に対する畏怖の気持ちがあったのだろう。下山の途中では、遭難者の「枯骨」を見て、「恐るべき山」と感じている。なお、季鷹と同じように絶頂の石を拾って持ち帰っている（『p11』）。



徳斎一行は寄り道もする。甲州道中の鶴瀬（甲州市）に泊まった翌日、「再び来るべき便もなく、このような時にこそ古跡を見るべき」と、武田氏滅亡の故地・天目山へ向かう。図は景德院にある武田勝頼と妻子、臣下の墓のスケッチ。「富嶽行記」唯一の挿絵である。



今日ハ母公を伴ひ、責て此まで来りし駿に、富士の人穴の古跡を一見まいらせんと駕籠を頼ミしに鑑興なし、止事なく案内者を雇ひたる処、行違ひにて兩人来り、しかハ是幸ひとて、とある鑑興を借受け宿院の恵なり、是にて立出て宮内村よりヲモスに出て本門寺と云法華寺に参詣す、都て富士の裾に五ヶ所の法華寺あり、此其一なり、尤大院なり、少し行けば甲州郡内路に出る、上井出の前に至れハ、往來の旅人専ら噂ありて云よふ、人穴の先、根原の辺りに狼出て、八人の怪我ありしとの事、若またおして至る事底気味悪鋪、是も神の告にもありななんと至らす止ミぬ、此辺り白糸の瀧あり、一見すへしと、た、人穴を見ざるハ遺念なり：

下山後の6月5日の部分。中道往還を通って人穴に行こうとするも、人穴の先で狼が出たという噂を聞いて断念。白糸の滝に向かうこととする。

僧侶の富士詣

富士山は修験の修行の場としての信仰も集めており、神仏習合の流れにより、仏教的要素が強かった。例えば絶頂を「八葉九尊」とする考えは密教的な世界観を表している。そして修験とは違った形で富士山に登拝する僧侶もいた。その一人が、天保14年（1843）に登拝して『扶茲日記』を著した江戸の在融である。

在融は増上寺（東京都港区）の学寮地の一つ三島谷を拠点にしていた浄土宗の僧侶である。6月に「檜田主」なる者が富士山へ参詣したことに刺激されたとしく、2、3人と語らって7月21日に出発する。

天保14年（1843）、浄土宗の僧侶・在融の富士山参詣旅
7/21：江戸三島谷の学寮（東京都港区）を出立、八王子（泊）⇒ 7/22：大善寺参詣、犬目（泊）⇒ 7/23：吉田着、御師・小沢遠江宅（泊）⇒ 7/24：吉田口より登拝、小御嶽神社参詣、六合五勺の石室（泊）⇒ 7/25：絶頂、吉田口へ下山、船津胎内、御師宅（泊）⇒ 7/26：逗留 ⇒ 7/27：御厨のきやり地藏堂、竹之下（泊）⇒ 7/28：小田原（泊）⇒ 7/29：江ノ島へ詣でる ⇒ 8/1：神奈川（泊）⇒ 8/2：池上本門寺参詣、帰着

在融一行はあまり寄り道をしていないが、八王子の浄土宗十八檀林の一つ大善寺に詣でたり、帰着直前には「よいついで」だからと日蓮宗の池上本門寺に参詣した。また、登拝も下山も吉田口を利用している。これは吉田口から登って駿河側へ下りる、いわゆる「御山を割る」という忌避に従ったものであるが、実際は駿河側へ下山する登拝者も少なくないことを聞き、「遺憾」と悔しがっている。

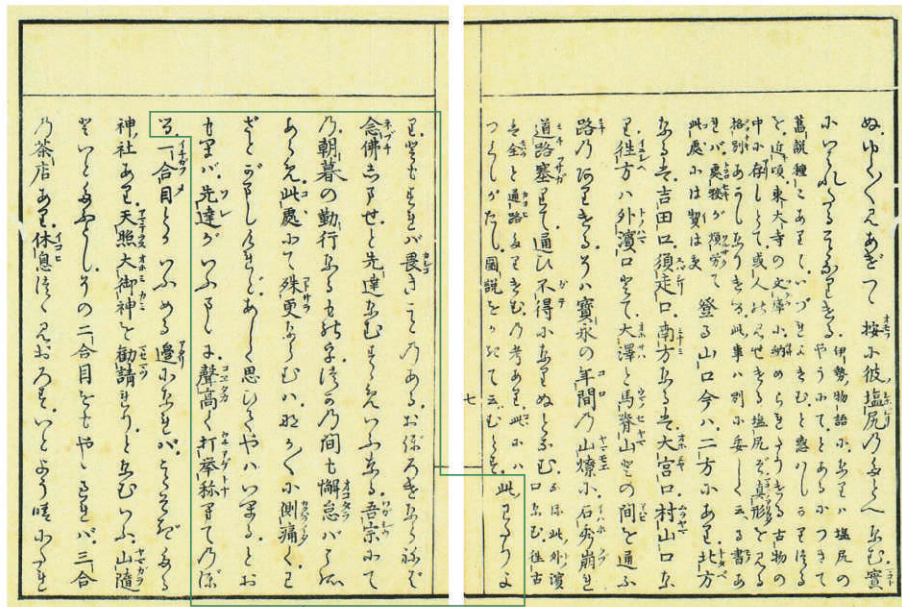
絶頂では「鉢廻」を行う。剣ヶ峰を見て、「大地の氣」が立ちのぼる限界（「冷際」）を感じ、「虚穴」（内院）から吹き出す風が雲霧を飛ばすとみている。富士山は「大地の柱」なる霊山なので、「虚穴」は世界の最下底（「風輪際」）に通じているのだらうと、スケールが大きい神聖な山として富士山を体感している。このような富士山の神聖さに接し、「煩惱を断じて菩提心をひらく」ことに登拝の意義を求めている。



11在融『扶茲日記』
富士市立富士文庫蔵
天保14年（1843）

縦26.3cm×横18.0cm

序文に当たる「端書（はしことば）」を京都から江戸に移った浄土僧・大雲（だいうん）が書く。大雲は音義に通じ、經典に付けた訓点は大雲点と呼ばれた。末尾には石見（島根県）浜田藩士だった国学者・岡部東平（はるひら）の「不尽山記」が付く。



此ノわたりより、ともすれ
バ畏きこと乃あるおほろけ
ならねば念仏しませと、先
達なむす、めいふなる、吾
宗にて乃朝暮の勤行なるも
のを、つか乃間も懈怠バこ
そあらめ、此処にて殊更な
らむハ、なか／＼に側痛く
わざとがましけれど、あし
く思ひてやはいへるとおも
へバ、先達がいふまゝに声
高く打拳稱へて乃ほる：

7月24日、馬返を過ぎた辺りの登拝の部分。先達の指示により念仏を唱えながら登る。この日は八合目の石室に泊まる予定だったが、暴風雨により六合五勺での宿泊を余儀なくされた。登拝中、悪天候に見舞われたことは、他の日記にも度々書かれる。

西からの富士参詣の旅

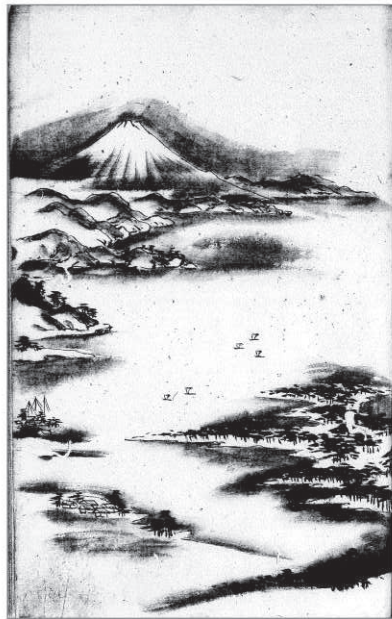
芙蓉亭蟻乗（本名未詳）は大坂に住む鍛冶職でありながら、狂歌師としても知られていたらしい。祖父は富士山への信仰心を持ち、若い頃から登拝することを願っていたが病気がちで果たせなかったという。芙蓉亭本人は、食行身禄の教えを継ぐ武蔵鳩ヶ谷（埼玉県川口市）の小谷三志が開いた「不二孝」（不二道）に帰依する。その教えは庶民道徳を説く心学よりも芙蓉亭には心地よく感じられた。そして、文政6年（1823）に念願の富士山登拝に出発する。道々、「旅の名所」を見るつもりでもあったことは、当時の参詣旅としては一般的である。その道中の記録「富士日記」は、詳細に書かれており、現在、写本の形で残されている。道中の名所・旧跡・寺社の概況や歴史・伝承、各地の名産物、その土地の風習や人びとの暮らしの様子など内容は多岐にわたり、史料としての価値は高い。以下、そのルートを載せる。

文政6年（1823）、大坂の芙蓉亭蟻乗の富士山参詣旅
5/27：大坂を出立、京都（泊）⇒ 5/28：石場で水行、義仲寺参詣、石部（泊）⇒ 5/29：石部で水行、鈴鹿神社参詣、関（泊）⇒ 6/1：宮（泊）⇒ 6/2：宮で水行、熱田神宮・笠置寺参詣、桶狭間見物、岡崎（泊）、相撲見物 ⇒ 6/3：法蔵寺参詣、吉田（泊）⇒ 6/4：亀見山窟堂観音参詣、浜名湖、浜松（泊）⇒ 6/5：龍潭寺参詣、天竜川で水行、見附（泊）⇒ 6/6：掛川（泊）⇒ 6/7：小夜の中山、岡部（泊）⇒ 6/8：柴屋寺参詣、駿府で浅間神社参詣、焼津神社・草薙神社・久能山参詣、江尻（泊）⇒ 6/9：清見寺参詣、薩埵山、米乃宮浅間神社・葉米寺参詣、大宮（泊）⇒ 6/10：六所浅間神社・大宮浅間神社参詣、白糸の滝で水行、人穴村赤池氏宅（泊）⇒ 6/11：赤池氏宅で水行、人穴参詣、本栖湖で水行、根場（泊）⇒ 6/12：西湖の北の山を越す、船津で水行、川口浅間神社・吉田浅間神社参詣、吉田御師小沢伯耆（団扇屋）に泊 ⇒ 6/13：西念寺参詣、明見湖で水行、船津胎内潜、小沢氏宅（泊）⇒ 6/14：登拝、小御嶽神社参詣、八合目の石室（泊）⇒ 6/15：絶頂、八合目の石室（泊）⇒ 6/16：吉田口へ下山、小沢氏宅（泊）⇒ 6/17：山中湖で水行、須走浅間神社・大乘寺参詣、中山村（泊）⇒ 6/18：沼津（泊）⇒ 大雨による川留で何日か沼津へ逗留（以後、日付不明）⇒ 浮島ヶ原、妙法寺参詣、吉原（泊）⇒ 藤橋見物、大宮（泊）⇒ 根原（泊）⇒ 本栖湖に出る、四尾連湖で水行、馬子の家（泊）⇒ 本栖湖・精進湖で水行、甲府柳町（泊）⇒ 蔦木（泊）⇒ 上諏訪神社・下諏訪春の宮参詣、下諏訪温泉（泊）⇒ 諏訪秋の宮参詣、藪原（泊）⇒ 寝覚ノ床、野尻（泊）⇒ 伏見（泊）⇒ 南宮大社・蓮華寺参詣、磨針山、多賀社参詣（宿泊地不明）⇒ 京都（泊）⇒ 大坂に帰着

芙蓉亭の参詣旅の特徴は、所々で水行している点に求められる。文化3年（1806）刊の『諸国図会年中行事大成』によると、京都では5月25日から6月2日まで「富士垢離」が行われた。これは富士行者の山伏が、期間中毎日、川辺で垢離を修し、富士権現を遥拝するもので、富士山に参詣したのと同じ効力があるととらえられていた。一般人が交じることもあったという。芙蓉亭は関西の水行を重視する富士信仰をバックボーンに持っていたと考えられる。出立の翌日には琵琶湖の南西端の石場（滋賀県大津市）で道中の安全を祈願して「瀬水」に身を浸す。ここでは三上山（同野洲市）を富士になぞらえて道中の安全を祈った。三上山は古くから和歌にも詠まれ、現在では「近江富士」とも呼ばれるが、御上（三上）神社の神体でもある信仰の山である。ただし芙蓉亭は精進湖での水行を終えた後は気が済んだのか、以降に水行の記事はない。

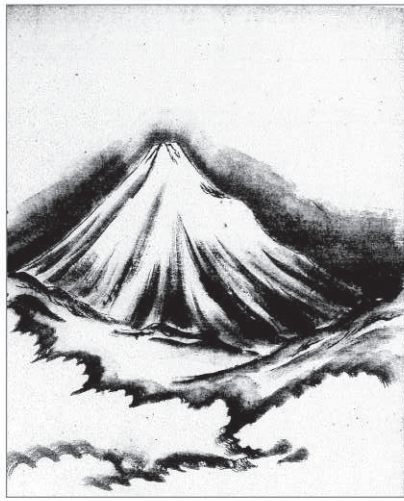
芙蓉亭の旅は富士山への信仰によるものだが、所々で名物を口にするなどして旅を楽しんでいる。例えば、当時日本最長だった矢作橋（愛知県岡崎市、約380m）の橋詰の茶屋で、茄子のしぎ焼きを肴に酒を飲み、酔いすぎて千鳥足で渡る。また、富士山の景観についてはこまめに記し、場合によってはスケッチも残す。富士山への思いが感じられる。

旅の一大転機となったのが、下山後の沼津で川留のため滞留を余儀なくされた時のことである。江戸流の料理屋で独酌していたところ、艶めかしい女に寄りつかれ、富士登拝の後に「不浄」のことがあっては、と誘惑を振り切る。そして宿に帰り、「寝たり起きたりを重ねるのは無益」と、中山道の本曾方面へ行くことを思い立つ。再び根原（静岡県富士宮市）から甲斐に入った芙蓉亭は、本栖・四尾連・精進の湖で垢離を掻き、中道往還を甲府に抜けた。そこからの記述はやや簡略になる。しかし、伊吹山を見て「近江・美濃にまたがる山で、二国にまたがるのは富士山と同じ」と述べ、伏見（岐阜県可児郡御嵩町）から犬山（愛知県犬山市）まで川舟に乗り、「今度の道中では、この川下りと富士山の砂走が、まことにはげしくいさましかった」と言うなど、富士山のこと常には心中にあった。

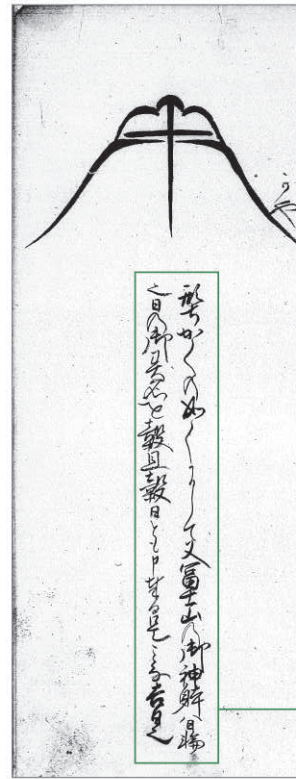


12芙蓉亭蟻乗「富士日記」(部分)
国立国会図書館蔵
文政6年(1823)

全3巻からなる写本で伝わる。図は冒頭部分に描かれた富士山。駿河湾や三保松原を含む構図は、狩野派など、それまでの富士山の絵画を参考にしたと考えられる。

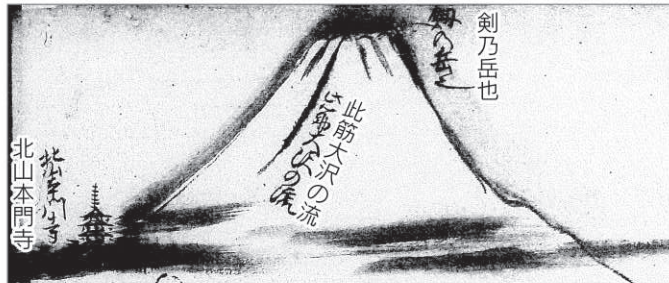


6月8日、草薙神社の記述の前部分に描かれた富士山。神社への参詣後は久能山に登り富士山を眺め、さらに江尻(清水)まで行く途中で「富士眺望随一の庭」がある竜華寺(静岡市)に寄る。

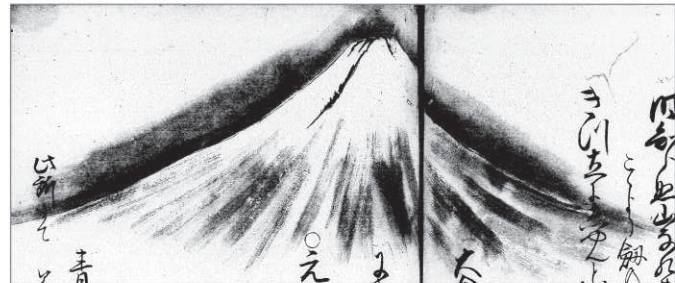


形ちかく乃如くにして、又富士山乃御神跡ハ日輪也、日乃御異名を穀旦・穀日とも申奉る、是ミナ吉日也

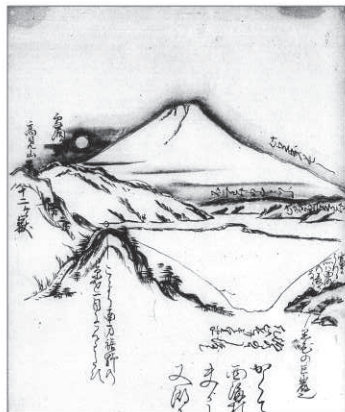
6月9日、米之宮(よねのみや)浅間神社に詣でる。1寸8分(約5cm半)の米粒が神体で、万民に米食の田を与える神とされる。江戸富士講の隆盛に大きな影響を与えた食行身禄は、仙元大菩薩が米を人びとにもたらしたと説いた(「三十一日の御伝」)。芙蓉亭は、このような教えを踏まえて、米という字は富士の形であることを示した。



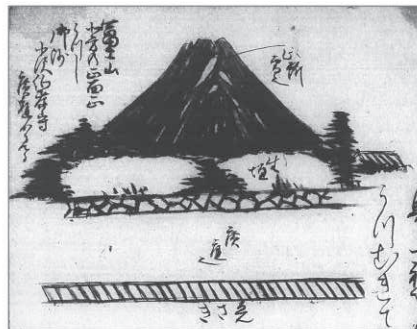
6月10日、大宮から北上、遠くに五重塔を見る。この辺りは大石寺・妙蓮寺・本門寺などの「法華五カ寺」があり、「禪定なす身へは尊くも聞つらむ 三光をひくうくひすの声」と詠む。図には大沢が描かれている。



6月11日、人穴参詣の後、甲斐国に入り、本栖湖で水行する。そして青木ヶ原を行き、根場へ向かう。図は11日の部分に描かれた富士山。青木ヶ原の道は樹木が鬱蒼とし、馬も駕籠も通行困難と書いている。



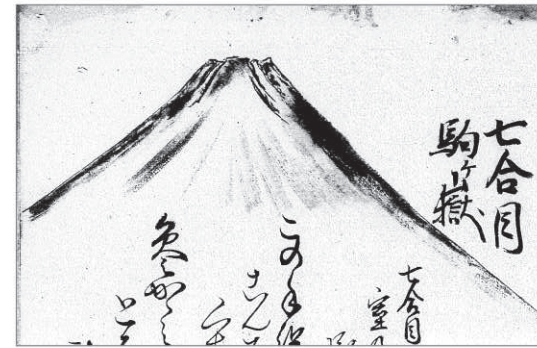
6月12日、朝に根場を發った芙蓉亭は西湖北岸の山道を行く。そして湖に映る富士を見る。



6月12日、吉田に着いた芙蓉亭は御師小沢伯耆宅(団扇屋)に宿をとる。敷地内の小川で水行してから広庭に回り、富士山を見る。



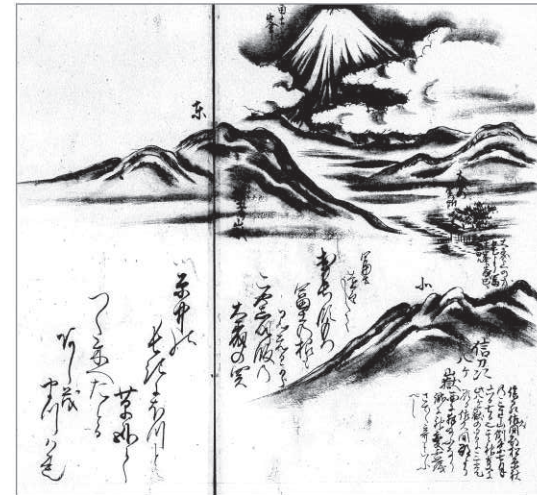
6月13日、芙蓉亭は明見湖で水行、北口本宮の前を通り神明社に詣でた後、船津胎内に潜る。



6月14日、登拝の最中、不浄ヶ嶽と駒ヶ嶽の間に富士を描く。七合二勾あたりより見下ろせば雲がたちこめており、「天地の間へ雲をほどこすは けにも富貴な不尽の大嶽」と詠む。



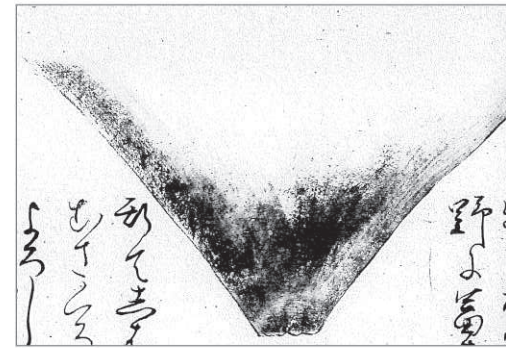
下山後の6月17日、雨中、仁杉の大乗寺に参詣した際、雲の切れ間から富士山を見る。



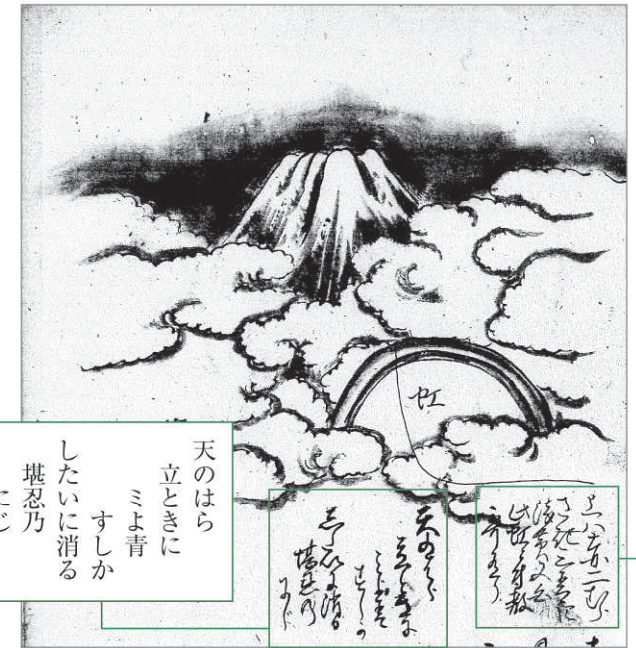
甲府から韭崎に出たところで、洪水により先の橋が落ちたと聞く。そこで七里ヶ岩の上を通る原路(はらみち)を行く。途上で見た八ヶ岳や駒ヶ岳と富士山を組み合わせて描く。

芙蓉亭にとっての絶頂

6月15日、九合目の日ノ御子まで登ってきた芙蓉亭は突然の暴風雨に襲われる。八合目の石室まで逃げ帰り、先達や強力が静かになった隙を突いての下山を勧めるが、芙蓉亭はどうしても登頂すると言い張る。正午頃、小康状態になったのを幸いに再び登山、ついに絶頂を極める。絶頂は芙蓉亭の認識では「八葉九尊」の靈地であった。お鉢巡りの途中、またもや「雨に小石が交じって吹き付ける」ような暴風雨に見舞われ、下山を決意。再び八合目の石室で一夜を過ごす。芙蓉亭は「三国第一山の靈地に至れば、生涯身の戒めになる」と、富士山登拝の意義を記しており、この「靈地」こそが絶頂であったのだろう。



八合目の石室に宿泊し、午前2時頃に起き出して麓を眺めたところ、月の光により裾野に富士山の影が見えたという。その後、味噌も醤油のもろみも分けられないような汁に餅だけを入れたもので朝食を済ます。午前4時には石室を出立する。

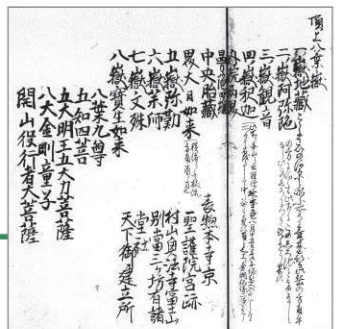


上ハ赤、二むらさき、三青、四浅黄、五白、此虹三付教歌有り

沼津で木曾へ向かうことを決めた芙蓉亭は、再び甲斐国を目指す。上井出から根原へ行く途中、富士の麓に虹がかかるのを見る。虹は2時間ぐらい消えなかったという。この日は空腹と疲労により根原の「あやしの家」に泊めてもらう。



塩尻峠からの諏訪湖と富士山。芙蓉亭は諏訪湖畔の衣ヶ崎について、「富士の影がうつる所」と書く。文化2年(1805)刊の『木曾路名所図会』を読んでいたのだろうか。絵の構図は後に歌川広重が描く諏訪湖の絵に似る。



絶頂の部分の記述。「八葉九尊」について記す。

富士山登拝の理由

富士山へ登拝する体験を通じて人びとは何を書き残してきたか。ここでは池川春水の「富士日記」と中山高陽の「登富士山記」という二人の土佐出身者の旅日記をみてみよう。

春水は土佐藩の下級武士の次男に生まれ、長じて国文学や医学を学び、明和2年（1765）に江戸へ出て、翌年には医師として市中に開業する。ところが盗賊にすべてを奪われ、安房国朝夷郡和田村（千葉県南房総市）に移り住む。旅好きだったらしく、和田村から富士山だけでなく、鹿島神宮や陸奥方面にも出かけた。明和8年の陸奥への旅日記「奥遊日記」からは、春水の人びとの風俗などに対する関心や、観察による科学的な考察がうかがえるという（清水孝之「池川春水の『奥遊日記』について」）。明和5年6月25日、春水は親しくしている善助なる者と和田村を出発、富士山参詣の旅に出る。旅の動機は「富士山の雪を見たいから」とシンプルである。

明和5年（1768）、池川春水の富士山参詣旅

6/25:安房国朝夷郡和田村（千葉県南房総市）を出立、百首（泊）⇒6/26:金沢へ渡海、鎌倉見物、腰越（泊）⇒6/27:江ノ島見物、大山御師高橋兵部太夫（泊）⇒6/28:大山詣、矢倉沢（泊）⇒6/29:須走へ着く、御師小野大和宅にて登山の準備、七合目の石室（泊）⇒7/1:絶頂、吉田口へ下山、大月（泊）⇒7/2:小原（泊）⇒7/3:高井戸（泊）⇒7/4:四ツ谷に差しかったところで記述が終わる

途中、大山へ詣でているが、「諸仏の堂多く、銭を貪る事甚し」と、金銭を徴収されることに反感をいだく。この感情は富士山ではより顕わになる。また矢倉沢（神奈川県南足柄市）に泊まった際は、同宿した甲州北八代村（笛吹市）の者に甲州金や甲州升のことなどを聞いたりした。よその風俗・習慣を知ることとは、春水の旅の目的の一つだった。

須走に着いてから、春水は御師から水垢離をするように言われ従うが、暑いので気持ちよく、足の腫れを冷やすのにちょうどよいと、登拝前の精進という意義は感じていない。そして、さまざまな名目で金銭を要求する輩が多いとして立腹している。夕方から登り始め、二合目からは松明を灯しての夜行登山であった。一緒に登ったのは、白装束で首に数珠をかけ、念仏を唱和しながら登る信仰登山の一団である。春水は、みんなで念仏を唱えれば、険しい急坂を登る「力」になると思っているのだろうと、冷静に観察している。登頂後は吉田口に下山し、富士道を大月に出る。「富士日記」の最後の部分は、郡内地方の養蚕や糸取りの技術の記述で占められており、春水の興味・関心がうかがえる。

高陽は高知城下の商家・阿波屋の次男である。早くから儒学・詩・書・南画を学び、宝暦8年（1758）に江戸へ出て画塾を開き、当地の南画の確立に貢献した。土佐藩の御用絵師も務め、宝暦11年には士分に取り立てられる。安永5年（1776）に熱海で湯治し、その時の体験を「熱海紀行」に記す。その熱海での滞在中は、たびたび北方の「日金峯」（十国峠）に登って富士山を眺める。その「海内ノ奇観」を見ているうちに登りたいと思うようになり、熱海で同行の者を2、3人得て、富士山へ向かった。

安永5年（1776）、中山高陽の富士山参詣旅

7/5:熱海を出立、三島社参詣、大森（泊）⇒7/6:須走口より登拝、四合目の石室（泊）⇒7/7:絶頂、須走（泊）⇒7/8:足柄峠に差しかかり、地藏堂で富士山を遠望したところで記述が終わる

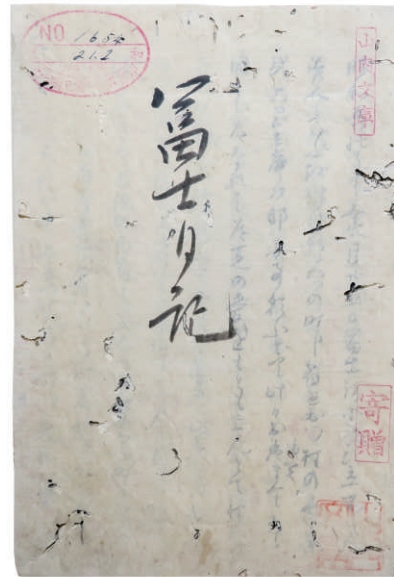
文人である高陽の登拝動機は景観への興味である。須走へ行く道では、雨具・草履・食物などの登山の用具を売る輩が、旅人を見ると集まってきたと言うが、春水のような憤りは感じられない。高陽も夕方から登拝にとりかかり、風雨のため四合目の石室へ宿泊する。午前2時頃、雨が止み、外に出てみると満天の星空であり、空中に飛び立つような感覚を覚える。富士山に「仙境」を求める高陽の期待が高まってゆく。森林限界より上は、「草木なく、獣類もなく、虫類も見えず、岩の上は塵も埃もなく、その清浄なことは尋常の山とは大いに異なる」と、期待通りの富士山の別世界ぶりに満足する。そして絶頂から四方を見回し、「天下を小とするような心になる」と、スケールの大きい眺望に感動するのである。

その一方で、山中での排泄物の処理や、絶頂での人びとの顔色の変化などについては、春水を思わせるような冷静な考察を書き記している。

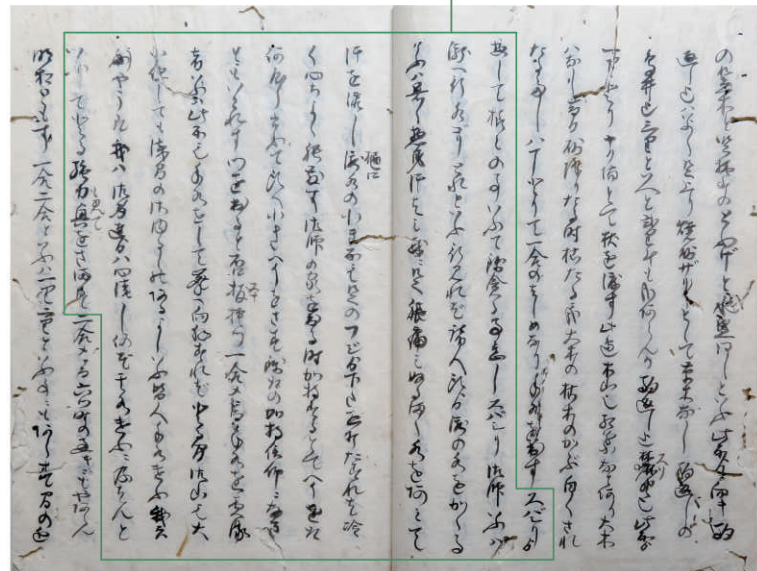
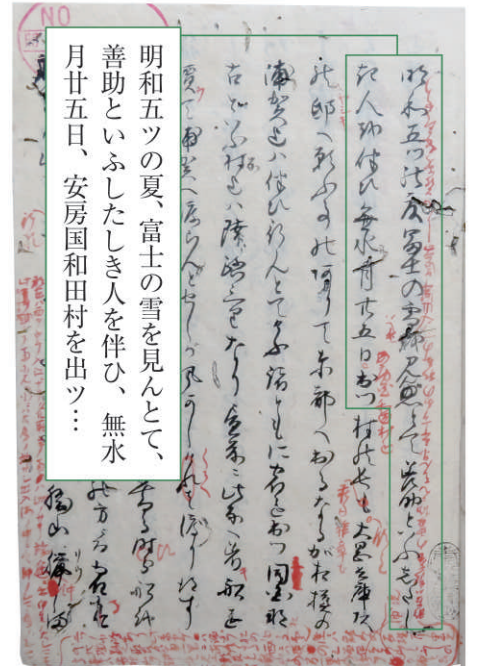
13池川春水「富士日記」

高知県立高知城歴史博物館蔵
明和5年（1768）

6月25日から7月4日までの日記。旅の部分は四ツ谷付近で記述が終わり、その後に「郡内蚕の法、糸取次第」を載せる。本資料は写本として伝わったもの。筆者の春水は後に陸奥を紀行し「奥遊日記」を著した。これは故郷・土佐の知り合いに喜ばれたという。



冒頭、春水が富士山登拝を志す理由を述べた部分。雪を見るためと、景色を満喫する旅であることを示唆している。



須走口より登山に取りかかるまでの部分。何かと言っては金銭を取ろうとすることに反発し、強力をあきれさせている。

：スパシリより惣して様々の事いふて銭貪る事甚し、スパシリ御師いふハ、瀧へ行、水ゴリとれといふ、行見れば諸人頭より瀧の水をかゝる、けふハ暑く惣身汗はミ、殊ニ足脹痛ミぬるまゝ、水をあみて汗を流し、樋口瀧水の小さき所にて、足のフジより下たを打たすれば、冷く心ちよく脹散す、御師の家を出る時、加持するとしてヘイを取、何やら云ふて、頭へ小きヘイをさす、銭取の加持信仰ニなきともいわれず門を出ると否拔捨ツ、一合メニ而手水を売る者いふハ、此所にて手水をして峯へ向拝すれば、登る間、御山にて大小便しても浅間の御ゆるしのあるよしいふ、皆人手水遣ふ、我云うやう、凡我ハ御身達よりハ心清し、何ぞ其水遣ふニ及はんといふて登る、強力も見て興をさます…

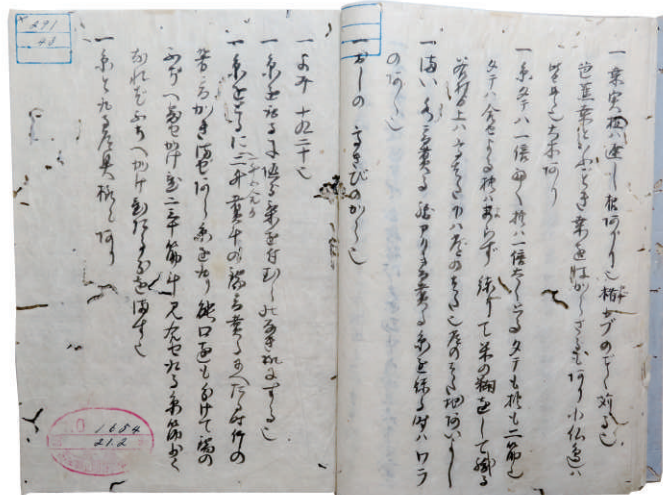
……三、四合の間、胸ツキ杯いふ所登り甚けハし、岩を片手ニてをさへ、片手に杖突きて登る、岩も焼岩ニて鉄はだのごとし、七、八合ノ辺ノ明松（松明）星のこつくかすか二見ゆ、強力いふ、富士の明松十里計見ゆと、何レの同行も念仏唱ぬハなし、或、髪をさはき白裳そく、首ニ数珠ヲかけ、同音ニ念仏して、且ハ道の力ニもなると見ゆ、人々大小便するに紙を地ニしき其上ニす、故ニ麓の小屋、或、御師方杯ニて紙を売、我紙を敷されば見る人怪しむ、我答ていわく、紙をしけとも土へ通らざるにあらず、まして石室の者、或、強力等紙をしかすと答ふ…

二合目に夕方6時ごろに着き、松明を灯す。ここからは夜行で七合目まで行く。富士山を汚さないための紙を敷かず用を足す春水は、紙を敷いても土にしみこみ、ましてや石室の者や強力は敷かないではないかと強弁する。

絶頂での春水

須走に着いて以降、御師の家で頭に挿された小幣を、門を出るやいなや捨てたり、手水を売る者に「自分

分はあなたよりも心が清い」と豪語したりした春水だが、八合目の石室で体調を崩す。頭痛と発熱のため、他の同行より遅れて石室を出て絶頂に至る。案内する強力にまず薬師を拝すように言われ、春水は浅間へ参るつもりもないのに、「私は浅間を重視していて薬師は信仰にない」と言い放つ。天候も良く、勧められてしかたなくお鉢巡りを始めるが、「袖を引いて、銭を貪るところが多い」と機嫌が悪い。駒ヶ嶽の下では筵を借り（有料）、昼寝する。そのため頭痛が治まり、再び歩き始める。鱒池の所で、「道造り」の寄附をねだる輩に付きまといられるが、「私は道などなくても通る」と切り抜ける。この年は、気温が高く雪がよく解け、目当ての雪は、賽の河原に少し残る程度だった。しかし、春水は敬虔な気持ちが全くなかったわけではない。内院に向かって、心静かに「山の霊」に祈りを捧げている。春水は、山霊が宿る聖地で、いかにも世俗的に金銭の徴収が行われていることに腹を立てたのであろう。



「富士日記」には「郡内蚕の法、糸取次第」が載る。この地域の産業について春水が関心を持ったことを示す。写真は末尾部分。

一桑実植ハ遅し、根あがり也、楮カブのごとく刈る也、芭蕉桑といふごとき桑をはからさるもあり、小仏辺ハ皆是也、大木あり

一糸、タテハ一倍細く、横ハ一倍太くとる、タテも横も二筋也、タテハ合せよる、横ハよらず、練りて米の糊をして織る、谷村より上ハ高はた、下ハ常のはた也、常のはた地あいよし

一まい 水ニ而煮る、綿アクニ而煮る、糸を練る時ハワラのあく也

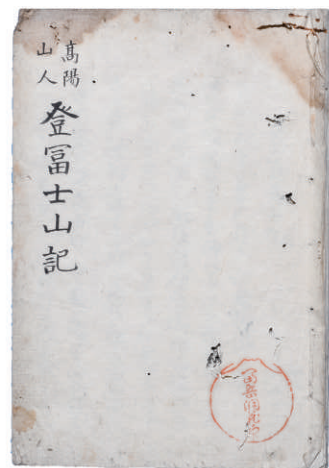
一おしの 高きびのから也

一よみ 十九、二十也

一糸を取るに随分気を付、むらのなき様にする也

一糸をとるに一升五合か二升煮汁の鍋ニ而煮る、にへたる時、竹の箸ニ而かきまぜ、あら糸を取り、能口をも分けて、鍋のふちへ寄せかき置、二、三十筋計見合せ取る、糸筋少くなれば、ふちへかけ置たる分をます也

一糸と取る道具様々あり



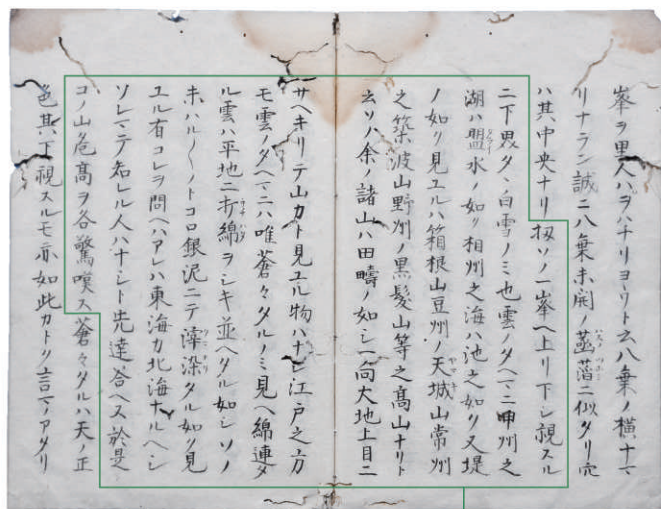
14中山高陽「登富士山記」

小山町立図書館蔵安田貞次コレクション

安永5年（1776）

縦21.8cm×横15.0cm

熱海での湯治後に富士山に参詣した折の紀行を書く。写本として伝わる。高陽は奥州を旅した際にも紀行文「奥游日録」を著した。



7月7日に絶頂に至り、そこから「下界」の眺望を楽しむ部分。

：扱ソノ一峯へ上り下シ視スルニ、下界タ、白雪ノミ也、雲ノタハマニ甲州之湖ハ盟水ノ如ク、相州之海ハ池之如ク、又堤ノ如ク見ユルハ箱根山、豆州ノ天城山、常州之築（筑）波山、野州ノ黒髪山等之高山ナリト云、ソノ余ノ諸山ハ田疇ノ如シ、一向大地上目ニサヘキリテ山カト見ユル物ハナシ、江戸之方モ雲ノタヘマニハ唯蒼々タルノミ見ヘ、連綿タル雲ハ平地ニ打綿ヲシキ並ヘタル如シ、ソノ末ハルノミ見ユルコロ銀泥ニテ澤染タル如ク見ユル有、コレヲ問ヘハ、アレハ東海カ北海ナルヘシ、ソレマテ知レル人ハナシト先達答ヘヌ、於是コノ山危高ヲ各驚嘆ス：

～「富岳雪譜」～

富士山への登拝については和久田寅（叔虎）も個性的な記録を残している。寅は浜松藩の医師であり、漢学者でもあり、上方で活動していた時期もある。享和3年（1803）に富士山に登拝、その時のことを「富岳雪譜」に記した。これは後に写本として出回ったらしい。

享和3年（1803）、和久田寅の富士山参詣旅

6/11：浜松を出立、宿泊地不明 ⇒ 6/12：（記述なし）⇒ 6/13：吉原（泊）⇒ 6/14：十里木で休憩、須山口より登拝、一合目の石室（泊）⇒ 6/15：絶頂、須走への下山の途中で六合目の石室に泊 ⇒ 6/16：竹之下（泊）⇒ 6/17：小田原（泊）⇒ 6/18：（記述なし）⇒ 6/19：江戸に着く

「富岳雪譜」によると、そもそもは浜松から江戸へ行く用事があり、最初から登拝を志していたわけではない。吉原（静岡県富士市）に宿をとった際、主人が「この頃、晴れの日が続いて富士山に詣でる者にとっては雨の心配がなくてよい。私も終日、雪がない富士山を眺めている」と話す。この言葉に刺激され、寅はにわかに富士山に登ってみたいと思う。友人との4人連れの旅だったが、江戸へ急ぐ1人と分かれ、3人で須山口に向けて出発する。夕方、須山に到着した寅は案内の強力と一悶着をおこす。強力に「必要になるから草鞋を10足買うように」と言われ、「私は草履の方がよいから」と言い張り、草履を6足買い、そのまま登り始める。強力が松明をもって先導する夜行登山である。他の同行が「浅間大菩薩」と高らかに唱えながら行くのに対し、寅は1人でどンドン強力を追い越して先へ進む。かなり自由に登拝している。

絶頂では、眼下に雲海を見て、雲に乗って天上に遊ぶ、「羽客飛仙の境界」にいるようだと、漢学者らしく神仙の世界を見いだしている。しかし、岩に向かって石を投げたり、歌を歌ったりと寅の自由な姿勢は絶頂でも変わらない。お鉢巡りの最中に急な暴風雨に襲われるが、風が静まるのを待ち、薬師ヶ嶽に詣でた後、須走に下りる。そこでは「人界に再生した心地」と記している。

寅は富士山を「最も名高く美しい山」と認識しており、そこに仙人が遊ぶような非日常的な理想郷を体感することに登拝の目的があったのだろう。その一方で、草履のまま絶頂に上がり、石を投げ、歌うというように、登拝の慣習にとらわれない自由さもあった。明治以降の信仰にとらわれない「近代登山」の萌芽を、「富岳雪譜」から読み取ることも可能だろう。

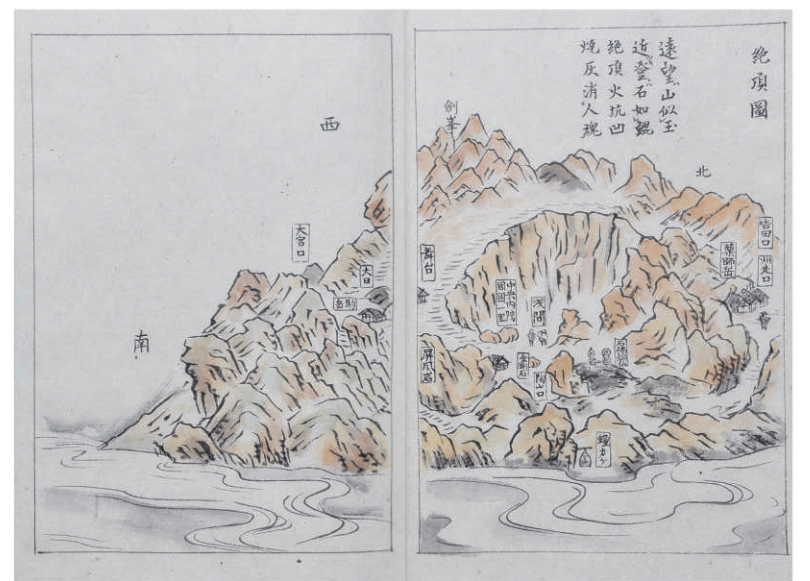


15和久田寅「富岳雪譜」（部分）

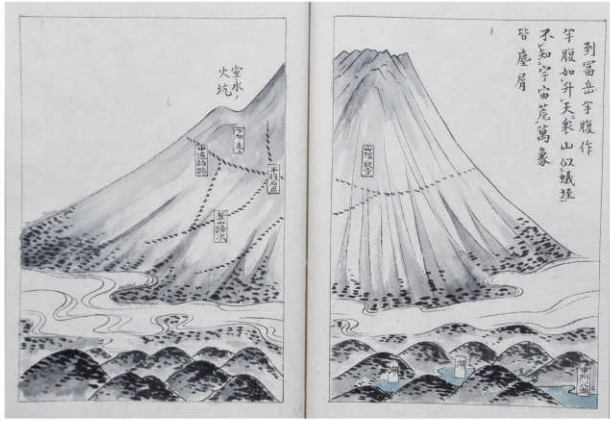
小山町立図書館蔵安田貞次コレクション

天保8年（1837）写 縦24.0cm×横17.9cm

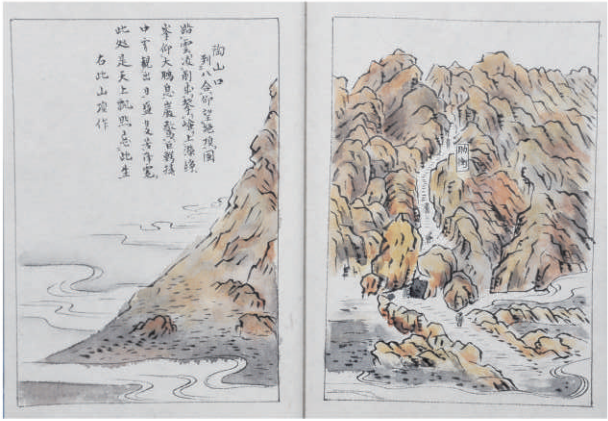
京都の東籬園が校訂した写本。上・中・下各編の3冊に分かれ、和久田寅の登拝部分は中編の末尾まで。下編は近江富士など諸国の「富士」を紹介し、肥後細川家の儒臣・秋山儀左衛門の「富士記」を載せる。図は上編の「富士室図」。岩間から水を運び、菰（こも）をかぶせた桶に寄せ、日に当てて溶かして水を得ることを示している。



中編に描かれている須山口からの方向を正面にした「絶頂図」。



上編。富士山の中腹の道を描く。「中道路跡」とある。寅は石室で中道巡について、「真の大丈夫」でなければ周回できないが、年に3～5人は巡る者がいることを聞く。



上編。須山口の八合目から絶頂を望む図。絶頂までは休息できる石室がないので、八合目の石室で準備をして、一気に登頂するという。



中編。須走口の登山道と下山道を描く。砂走は「滝に乗って下るような勢い」だと驚く。



寅は富士山の自然についてもよく観察する。オニアザミについて砂上にもかかわらず、よく繁茂していると中編に描く。須走口二合目の茶屋ではオニアザミの根の煮付けを食べ、おいしいと褒める。



16行衣
大正時代（20世紀）

富士講中が身に付ける白衣（びゃくえ）。本資料は東京の麻布山三講の講員であった故村尾捨三氏の遺品である。江戸・東京の富士講が用いた行衣の典型で、細帯を巻く。背中や袖には、富士の牛王宝印（ごおうほういん）を版刷りしてある。大正10年（1921）7月に初登頂をはたした村尾氏は、行衣の内側にその様子を詳しく綴っている。富士山に登る旅には、その個人によってさまざまな理由があるが、「近代登山」が主流となっても、富士信仰による登山は続いている。



当センター蔵



17信胤世彦「富嶽絶頂俯瞰図」
富士市立富士文庫蔵
縦66.8cm×横57.0cm

信胤世彦の手による富士山頂上を中心として真上から俯瞰した図。吉田・須走・須山・村山のどの登拝拠点を利用するにしても、参詣旅の者にとっては、「内八海」も含めて、富士山周辺の概略を知ることのできる案内図だっただろう。



18富士登山記念写真
大正時代（20世紀）



個人蔵

明治16年（1883）に新しく開かれた御殿場登山道での記念写真と思われる。左の写真の裏には登頂記念のスタンプが押してある。右の裏には、大正8年（1919）8月18日に、八合目石室付近で撮影した旨が書かれている。近代になると旅日記という登拝の記録に、写真という新しいメディアが加わり、登拝する理由も多様化する。



企画展「富士山への旅 ―旅日記の世界―」 展示資料

No.	資 料 名	年代	所蔵者	掲載頁
1	「国々名山高山道しるべ」	江戸時代(19世紀)	富士市立富士文庫	2
2	「東面略図」	明治時代初期(19世紀)	富士市立富士文庫	3
3	「富士石尊道中記」	寛政6年(1794)	個人	4
4	「富士登山道案内日記」	安政6年(1859)	個人	5
5	「富士参詣道中日記」	万延元年(1860)	個人	5
6	歌川芳幾「富士山北口女人登山之図」	万延元年(1860)	小山町立図書館	6
7	四方梅彦編『富士山道知留辺』	万延元年(1860)	小山町立図書館	7
8	假名垣魯文『滑稽富士詣』	万延元年(1860) 一文久元年(1861)	小山町立図書館	8・9
10	原徳斎「富嶽行記」	書写年代未詳	富士市立富士文庫	12・13
11	在融『扶茲日記』	天保14年(1843)	富士市立富士文庫	14
14	中山高陽「登富士山記」	安永5年(1776)	小山町立図書館	20
15	和久田寅「富岳雪譜」	天保8年(1837)写	小山町立図書館	21・22
16	行衣	大正時代(20世紀)	当センター	22
17	信胤世彦「富嶽絶頂俯瞰図」	年未詳	富士市立富士文庫	23
18	富士登山記念写真	大正時代(20世紀)	個人	23

パネルによる展示

9	賀茂季鷹『富士日記』	文政6年(1823)版	国立国文学研究資料館	10・11
12	芙蓉亭蟻乗「富士日記」	文政6年(1823)	国立国会図書館	16・17
13	池川春水「富士日記」	明和5年(1768)	高知県立高知城歴史博物館	19・20

山梨県立富士山世界遺産センター

令和3年度 第2回企画展

富士山への旅 ―旅日記の世界―

協力者 (敬称略・順不同)

村尾静彦

小山町立図書館、高知県立高知城歴史博物館、国立国会図書館
人間文化研究機構国立国文学研究資料館、富士市立富士文庫

本誌は企画展「富士山への旅―旅日記の世界―」(令和3年12月25日～令和4年2月23日)の概要を紹介した展示解説です。展示物以外の資料や景観などについても写真を掲載しています。写真解説に付した算用数字は、展示資料の資料番号です。執筆・編集は、当センター調査研究スタッフ(金子誠司・堀内亨・堀内眞・根岸崇典)が担当しました。

令和3年(2021)12月25日発行

編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター

〒401-0301

山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1

TEL 0555-72-2314

印刷 株式会社 少國民社

〒400-0851

山梨県甲府市住吉1-13-1

TEL 055-226-2125